行動計量学会報

日本行動計量学会事務局
〒115 東京都北区西が丘 3-9-14
国立国語研究所　江川 清
発行 理事長　水野 欽司
題字　林 知己夫
編集　杉山 明子

生活習慣の計量

高木　廣文

ここ１０年以上の間、生活習慣調査票の開発と研究を共同で行っている。成人病、老人病などと呼ばれる多くの疾患の原因として、長期間にわたる日常の生活習慣が考えられるからである。生活習慣といっても喫煙や飲酒のように、誰でも思いつき、かつ実際の影響がある程度明らかとなっているものもあれば、町内会などの地域での活動状況や、自発性、情緒不安定など、あまり関係はなさそうであるが、間接的な影響はあるかもしれないといったものまで範囲は広い。盛り沢山にすれば、こちらは都合がよいかもしれないが、調査を受ける側は大変であり、未記入の割合が増えたり、質問に正しく答えてくれなくなる恐れもある。

実際には、生活習慣調査票を用いると何が明らかになるかが問題になる。最終的には、我々が設定した生活習慣尺度を用いて、各個人の健康の将来予測ができればよいのだが、そこまではなかなか到達できそうにもない。現在行っていることは、いくつかの地域小集団や企業集団などの調査を行い、ある特性の相違による生活習慣尺度得点の差を調べたり、生理学的な特性と何らかの関連や相関がないかを、統計学的に検討しているところである。ただし、統計学的には有意な関係や差が認められても、結果の解釈には慎重さが必要である。たとえば、高血圧の既往のあるグループと、そうでないグループを比べた場合、高血圧グループでの生活習慣尺度のうち塩分、糖分、肉・油脂尺度などの得点が低くなっており、より健康の維持にとって好ましいと考えられる食習慣を示した。しかし食習慣を原因として考えると、おかしなことになるだろう。高血圧の患者は結果として、食事に気をつけていることを示しているのであって、食習慣を原因として考えると誤った結論を導くことになる。しかし、このようなことは他の研究成果の情報があるから言えるのであった、そうでなければ解釈を誤る可能性の方が高いのではなかろうか。

質問紙を用いる方法は、基本的には対象者の意識に依存しているので、構成した尺度が意識上だけでなく実態をどの程度反映しているかが最も重要な点となる。例えば、食塩の摂取量などを正確に把握するのは結構難しいもので、評量法による食事調査を行えば確実に分かるといったものでもない。摂取量ではなく尿中の排摂量を調べるなどにより比較的安定した数値を得ことができる。塩分排泄量と塩分尺度の相関を調べると、統計学的には高度に有意なのだが、相関係数自体は 0.5にも達していない。そういった場合、尺度構成は失敗なのだろうか。それとも、特定の１日の測定データよりも質問紙による結果の方が、対象者のより一般的な傾向を示すものなのであろうか。さらに考えると、実態がそもそも測定できないものは、どのように評価すればよいのだろう。疫学的な考えからすれば、適当な集団を１０年、２０年と追跡して、生活習慣尺度と特定の疾患の発生や死亡との関係を調べ予後予測に設定した尺度が有効か否かで判断すればよいのだが、気の長い話である。

（たかぎ　ひろふみ、日本行動計量学会理事、統計数理研究所）

理事長の任期を終えて

肥田野　直

１９８８年改訂会則のもとで第２代の理事長に選出されて以来３年間の任期中多くの役員、会員のご協力ご鞭撻を頂いた。この３月をもって任期を終えるにあたり皆様に心からお礼を申し上げたい。

日本行動計量学会が１９７３年に創立されてから７期約１５年間に亘り理事長として林知己夫先生が育てて来られた学会の伝統を汚すまいと微力を尽くしたつもりであるが、いたらないところが多々あった。これを支えて下さった事務局長の江川清理事に厚く御礼申し上げたい。　この３年間に千葉大学、岡山大学、東京女子大学で大会が開催されたが、その準備・運営に当たって下さった柏木繁男、脇本和昌、杉山明子の各大会委員長に深い謝意を表すものである。また、千葉大学での大会に国際会議参加のため欠席を余儀無くされた際、林先生に感謝する会を始めすべてを取り仕切って下さった野元菊雄理事長代理にお礼を申し上げなければならない。

機関誌を定期的に発行するには関係者の目に見えない大変な苦労がある。特に欧文誌は文部省の刊行助成費を受けているため刊行の時期を厳守しなければならない。編集委員の交替などで期限内刊行が危ぶまれた危機を乗り越えて下さった宮原英夫編集幹事長のご功績を称えたい。

その他の主な事業としては月例シンポジウム第５０回を記念して「行動計量学の歩み」をテーマに取り上げたことや「日本行動計量学会会報」を第５０号から横組に改めたことなども印象に残ることである。

以上は私の任期中の学会運営についての報告であるが、ここに自己評価の意味を含めた感想を付け加えることを許して頂きたい。

第一は会員数の動向である。　第５０回のシンポジウムで、柳井晴夫理事が発表した本学会の発展経過によれば、会員数は１９８４年に１０００名を越えて以来頭打ちの状態にある。とくに目立つのは準会員の数が減少していることである。１０年前には１７０名に達したこともあるが、漸減して本年は３０名を割った。正会員への昇格や長期会費滞納者の整理などの影響もあろうが、若手会員の減少傾向を否定することはできない。

第二はシンポジウム、講習会等の不活性化である。　学会発足当時は年５～６回も開かれたが、近年は年１～２回となって５１回からは「月例」を取り、単に「シンポジウム」と称するようになった。講習会も活発に開かれ、夏期合宿をした時期もあったが最近は殆ど開催されなくなった。また、当初１０以上もあった小グループ研究会のうち社会調査技法研究会や関西地区・名古屋地区のグループは長く続いてきたが、最近は活発でないようである。

これらの動向は本学会が安定した成熟期に入った代わりに往年の気負いと活気を失ったことを物語っているように思われるのである。これは本学会のような学際的学会の宿命かも知れない。それぞれ固有の研究領域を持つ研究者が他の領域研究者と敢えて協同していくためには非常なエネルギーを要するのであり、それぞれの領域での責任が増す程手を引かざるを得ない。若手研究者の場合は講習会や研究会から収穫が期待できるか、研究発表の場として魅力的であれば入会するであろうが、特に必要がない限り固有の領域の学会と違って所属する義理を感じない。

こうした研究者のタコツボ型態度への復帰が目立つ一方、Human Dimensions of Grobal Environmental Change の研究計画が国際的に開始され、日本学術会議もこれに積極的に対応しようとしている情勢にも目を向ける必要がある。その意味で、本学会のような学際的学会の存在意義も改めて見直されるべきであろう。

（日本行動計量学会理事、東京大学名誉教授）

私の行動計量学

第５回学会賞(功績賞)を受賞して

宮原　英夫

私は行動計量学会が創立してからずっと欧文誌編集幹事会の末席をけがしてきました。幹事長が代わるたびに適任でないことを理由に辞任を申し出たのですが、ずるずると留任が続き、この３年間はとうとう幹事長をやる羽目に陥ってしまいました。その間、掲載論文のバラエティを増そうとか、論文を専門領域は違っても考え方だけは追えるように書いてもらおうとか、努力はしてきたつもりなのですが所期の目的を十分果たせないまま今日に至っています。

それにもかかわらず、第１８回大会で功績賞を頂くことになったのは、ひとえに会員のご厚意と同僚の編集幹事諸兄姉のご協力のたまものと感謝致しております。あいにく一年に一度の学生実習の時期と重なり、大会にどうしても出席できず失礼してしまいました。あらためて会員の皆様にお礼を述べさせて頂きます。

私は大学卒業後一年ぐらいして、医師の診断過程につきまとう再現性の悪さ、精度の低さを線形判別関数を使って改善できないか 研究されていた高橋眹正先生のグループに参加しました。しかし神経疾患や肝臓疾患などの病歴を使って実験をくりかえしている内に、統計モデルだけが重要なのではなく、患者とモデルを結びつけるための症候の選択や数量化、モデルの出力と臨床とを結びつけるための疾患単位の統計学的定義と医学的定義の関係などモデルの前後に付く数学－医学インターフェースの部分も等しく重要であると考えるようになりました。「運動機能テストにおける重症度の判定法」、「心理テストＭＭＰＩ日本語版における翻訳の影響」、「中医学における病気の分類」などいくつかの研究を当学会誌に発表させてもらいましたが、いずれの場合にもレフリーからいただいたコメントが、たいへん参考になり今でも感謝しております。その際心理学など他の学問領域では常識となっていることを、何年もかけてたしかめるといった愚かさをたびたび実感してしまいましたが、それはそれで良いと割り切っています。

現在やりたいと思いながら、のびのびになっているものの一つは、増山元三郎先生が提唱している「成長の法則」と「個体差」の勉強です。日科技連の欧文レポートＴＲＵ mathematics を中心に１０年以上に亘って発表されている先生の報告はユニークな視点に立つ研究の成果とそれらに基づくヒントに満ちていますが、時間をかけて考えないとフォロー出来ない事が多くいつの間にか文献がファイルにたまりっぱなしになっています。最終的には個を対象としなければならないことの多い臨床医学でこれらの業績をどのように活用できるか自分で集めたデータに照らしながら一つ一つ読んで行きたいと考えているところです。行動計量学会会員のお力添えをお願いします。

（日本行動計量学会理事、北里大学）

学会賞候補者の推薦を

現在、第６回学会賞受賞候補者を選出する準備を行なっています。皆様の身近な会員の中に適当な候補者がありましたら、事務局まで文書でお伝え下さい。

[記載事項]

①推薦対象となる賞の名称(功績賞または優秀賞)

②候補者の氏名・所属

③その候補者の業績の内容(論文の題目・氏名・巻号、著書・その他の刊行物の名称・発行所・刊行年など)

④推薦者氏名・印

[様式]　推薦候補者ごとにＢ５版一枚

[期限]　平成３年５月３１日

[送付先]〒115東京都北区西が丘3-9-14
国立国語研究所内 日本行動計量学会
事務局江川清

なお、学会賞の選考方法については、「会員名簿」79-80 ページにあります。

会議記録

★　理事当選人会議

時：平成３年３月28日
所：統計数理研究所
出席者：理事当選人10名
委任状提出者：10名
１．水野欽司氏を理事長に選出した。任期は平成３年４月１日から平成６年３月31日までの３年間。
２．役員選出に関する細則15条にもとづき４名の追加理事を選出した。
［別記参照］

★　理事会

時：平成３年４月17日
所：統計数理研究所
出席者：理事13名
１．理事の会務分担を決定した。［別記参照］
２．学会の今後の方針、特に学会の活性化についての話し合いが行われた。
３．前回保留分の追加理事１名を選出した。
４．事務局報告が行われた

▼　追加理事の決定

細則15条による追加理事として次の５氏が選出された。任期は平成６年３月末まで。
市川雅教（東外大）
海野道郎（東北大・文）
繁桝算男（東工大・工）
村上征勝（統数研）
宮原英夫（北里大・医）

▼　第９期理事会の会務分担決定

４月17日の理事会で決定した理事の役割分担は次の通りです。任期は平成６年３月末まで。
［編集委員長］柳井晴夫（大学入試センター）
［欧文誌幹事長］村上征勝（統数研）［和文誌幹事長］田栗正章（千葉大・理）
［運営委員長］岩坪秀一（大学入試センター）
［刊行物委員長］林知己夫（統数研）　［大会担当］池田央（立教大・社）
［学術会議担当］江川清（国語研）　［事務局担当］繁桝算男（東工大・工）

【学会誌への投稿論文の募集】

日本行動計量学会では、学会誌として欧文誌・和文誌を、それぞれ年２回ずつ発行しています。しかしこれらの学会誌への投稿論文数は、必ずしも十分とは言えない状態にあります。皆様の投稿を、ぜひお願い致します。

投稿原稿は事務局ではなく、それぞれの編集幹事長宛に送付して下さい。

和文誌『行動計量学』への投稿
〒260 千葉市弥生町1-33 千葉大学理学部数学教室
田栗正章(和文誌編集幹事長) 宛

欧文誌" Behaviormetrika" への投稿
〒106 東京都港区南麻布4-6-7 統計数理研究所
村上征勝(欧文誌編集幹事長)宛

特に和文誌への投稿は、学会専用の用紙を使用するか、ワープロを用いて作成して下さい。 原稿用紙の請求先、送金先は事務局(国語研・江川清)です。

ワープロによる原稿は通常の用紙・印字で受付けますが、必ず 1行24字 の横書きとして下さい。１頁の行数についての規定はありませんが、Ｂ５版２０行程度でお願いします。

会員数

（1991年4月1日現在）

名誉会員	1名
正会員	1,019名
準会員	54名
賛助会員	26名

編集後記：

肥田野直理事長から水野欽司理事長に代わり、理事の会務担当も相当変更しました。
これまでの理事長・理事の皆様ご苦労さまでした。新しい理事長・理事の方々、これからよろしくお願いします。
（とくに会報への出稿を）
なお、事務局も東京工業大学に移りますが、それに伴う諸事変更については、次号の会報で詳しくお知らせします。
（め）